

保育の場におけるてんかんの子どもへの保育者の対応

東京未来大学こども心理学部 西村実穂

I. はじめに

医療の発達により、地域で生活する慢性疾患のある子どもが増加している。それに伴い、慢性疾患のある子どもが保育所、幼稚園へ入園するようになり、保育者が慢性疾患のある子どもに対応する機会が増えている(片山, 2010)。

てんかんは小児期に起こりやすい慢性疾患のひとつであり、てんかんのある子どもの保育所、幼稚園への入園機会も増加していると推測される。しかし、保育現場における保育者のてんかんの子どもへの対応についての研究はみられず、保育者がてんかんについていかなる認識を持ち、てんかんの子どもにどのように対応しているのかは明らかではない。

学齢期以上のてんかんの子どもについての研究に目を向けると、教員は、てんかんという疾患そのものについては知っているが、対応に自信がない者が多いこと(守口・永井, 2015)、てんかんの子どもを担当する場合には、発作への対応方法は担任教師個人の判断に委ねられているケースが少なくないため、教員が不安を感じていることが明らかになっている(杉浦・小貫・平野・小沢, 2012)。

保育の場においてもてんかんの子どもへの対応が保育者に委ねられる可能性が高いと考えられる。また、対応する場合には、保育者が適切に対応できるかどうかは定かではない。そこで、本研究では保育者がてんかんのある子どもに対応することがあるのか、てんかんの対応方法について正しい認識を持っているのか、また実際に対応する必要があった場合にはどのような対応をしているのかを明らか

にすることを目的とする。

II. 方法

調査対象者：関東近県の保育所、幼稚園に勤務する保育者 145 名であった。

調査手続き：以下の 2 通りの方法で質問紙を配布、回収した。

①保育者を対象とした研修会の開始前に質問紙を配布し、研修会終了後までに回答してもらおうよう依頼し、研修会終了後にその場で回収した(56 名からの回答を得た)。

②質問紙調査への同意の得られた保育所、幼稚園に対して質問紙を郵送し、その園に勤務する保育者に回答してもらった。回答後、園ごとに質問紙をまとめて返送してもらった(89 名からの回答を得た)。

調査項目：回答者の属性に関する項目(7 項目)、てんかんの子どもの保育経験に関する項目(7 項目)、てんかん発作時の対応に関する項目(3 項目)の計 17 項目であった。

調査実施時期：平成 27 年 4 月であった。

倫理的配慮：東京未来大学倫理審査委員会による審査を受けて調査を実施した(受付番号 31)。

III. 結果

1. 対象者の属性

145 名からの回答があり、無効回答 16 部を除いた 129 名の回答を分析対象とした。対象者の属性を表 1 に示した。保育士として勤務している者が最も多く(67%、86 名)、幼稚園教諭が 29% (38 名)、園長など管理職の者が 4% (5 名)であった。勤務先に看護師がいると回答したのは 24%(31 名)のみであった。

表 1. 回答者の属性

		(n=129)	
項目		n	%
年代	20 歳代	52	40%
	30 歳代	39	30%
	40 歳代	29	22%
	50 歳代	8	6%
	60 歳以上	1	1%
職種	保育士	86	67%
	幼稚園教諭	38	29%
	その他	5	4%
保育者としての経験年数		10.21(±7.67)年	
勤務形態	常勤	105	81%
	非常勤	20	16%
勤務施設	保育所	88	68%
	幼稚園	41	32%
勤務施設に看護師がいる		31	24%

表 2. てんかんの子どもへの対応経験

		(n=47)	
		n	%
てんかんの子どもとの関わり方			
	担当以外のクラスに在籍していた	26	55%
	担当クラスに在籍していた	18	38%
	加配として担当していた	3	6%
子どもの発作についての知識(複数回答)			
	保護者から聞いて知っていた	44	95%
	自分で勉強して知っていた	9	19%
	知らなかった	3	5%
保育時間中の発作の状況			
	子どもが保育時間中に発作を 起こしたことがある	35	74%
	発作時の子どもへの対応経験あり	19	40%

2. てんかんのある子どもへの対応経験

てんかんのある子どもの保育経験を尋ねたところ(表 2)、36%(47 名)の保育者がてんかんの子どもに関わった経験があると回答した。てんかんのある子どもに関わったことが

ある者にどのような発作が起こるか知っていたかを尋ねたところ、ほとんどの者が「保護者から聞いて知っていた」(てんかんの子どもの保育経験がある 47 名中 96%、44 名)と回答したが、一方で「知らなかった」者が 3 名(6%)いた。保育時間中に子どもが発作を起こしたことがあると回答した者が 74%(35 名)、子どもが発作を起こした際に自身に対応したことがある者が 40%(19 名)いた。

3. 保育者の考えるてんかん発作への望ましい対応

回答者全員に対して、発作が起きたときにどのように対応するのが望ましいのかを尋ねたところ(表 3)、「発作の時間を測る」(92%、119 名)、「他の保育者を呼ぶ」(90%、116 名)、「保護者に連絡をする」(90%、116 名)の順に選択した者が多かった。少数ではあるが、「口にハンカチを入れる」(7%、9 名)、「口にわりばしを入れる」(4%、5 名)、「身体を押さえる」(2%、3 名)、「発作中に薬を飲ませる」(1%、1 名)などの誤った対応を選択していた者がいた。

4. 実際の対応と望ましい対応の違い

実際に発作に対応した経験のある保育者 19 名に対して、発作が起こった時にどのような対応を行ったかを尋ねた。Fisher の直接確率計算法を用いて、望ましい対応と実際に行った対応を比較した。実際の対応と望ましい対応の間で有意差があったのは、「救急車を呼んだ」、「他児を落ち着かせる声かけをした」、「けががないかを確認した」、「脈拍を確認した」、有意傾向がみられたのは「保護者に連絡をした」、「発作の時間を測った」、「衣類をゆるめた」、「看護師を呼んだ」であった(表 4)。いずれも対応を実施した者の割合が望ましいと考えている者よりも少なかった。

表 3. 保育者の考える
てんかん発作時の望ましい対応($n=129$)

	<i>n</i>	%
発作の時間を測る	119	92%
他の保育者の応援を呼ぶ	116	90%
保護者に連絡をする	116	90%
呼吸をしているか確認する	92	71%
衣類をゆるめる	85	66%
救急車を呼ぶ	81	63%
危険なものをよける	75	58%
顔を横に向けて寝かせる	74	57%
他児を落ち着かせる声かけをする	73	57%
名前を呼ぶ	72	56%
発作の様子をメモする	62	48%
他児を遠ざける	62	48%
看護師を呼ぶ	59	46%
けががないかを確認する	56	43%
脈拍を確認する	49	38%
熱を測る	41	32%
安全な場所に連れて行く	40	31%
既往歴を児童票などで確認する	15	12%
他児に状況を説明する	14	11%
発作をカメラやビデオで記録する	11	9%
口にハンカチを入れる	9	7%
身体に触れないようにする	6	5%
口にわりばしを入れる	5	4%
背中をさする	4	3%
発作後に薬を飲ませる	4	3%
身体を押さえる	3	2%
だっこをする	2	2%
人工呼吸をする	2	2%
心臓マッサージをする	2	2%
発作中に薬を飲ませる	1	1%

(選択式、複数回答)

表 4. 発作時に実際に行った対応と
望ましいと考える対応の比較 ($n=19$)

	実際の 対応		望ましい 対応		<i>p</i>
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	
保護者に連絡をした	15	79%	19	100%	+
発作の時間を測った	13	68%	19	100%	+
衣類をゆるめた	8	42%	13	68%	+
救急車を呼んだ	7	37%	14	74%	*
他児を落ち着かせる 声かけをした	6	32%	10	53%	*
けががないかを確認 した	4	21%	12	63%	*
脈拍を確認した	3	16%	9	47%	*
看護師を呼んだ	2	11%	7	37%	+

*: $p < 0.05$, +: $0.05 < p < 0.10$

IV. 考察

てんかんの子どもに関わった経験のある保育者のうち、保育時間中に子どもが発作を起こしたことがあると答えた者が 74%、発作に対応した経験がある者が 40%いた。ここから、てんかんのある子どもを受け入れている場合には、保育時間中に発作が起こることや保育者が発作に対応する機会が少なくないことがわかる。この理由として、小児期は治療方法が定まらない時期であること、服薬治療をしている場合には、薬の種類や量を調整する時期であることなどが考えられる。

てんかん発作時の望ましい対応について尋ねたところ、多くの保育者が「発作の時間を測る」ことや「呼吸の確認をする」、「保護者への連絡をする」といった選択肢を選んでいた。てんかん発作が起きた場合には安全確保、発作時間の計測、発作の観察が必要である。ここからてんかんへの正しい対応を認識している保育者が多いことがうかがえる。しかし、少数ではあるが、「口にハンカチを入れる」、「口にわりばしを入れる」、「身体を押さえる」などの誤った対応を選択している保育者がいることは問題であり、早急に正しい対応方法について周知する必要がある。

さらに、他児への対応については「他児を落ち着かせる声かけをする」(57%, 73名)を選択した者は半数を超えていたが、「他児に状況を説明する」(11%, 14名)を選択した者は少数であった。保育中は、家庭のなかで発作を起こした場合と異なり、他児への影響を考慮する必要があるため、保育者は他児への対応も行わなければならないことを認識しておくべきである。

実際に発作に対応した経験のある保育者が実際に行った対応と望ましい対応を比較したところ(表 4)、有意差・有意傾向がみられる項目があった。ここから望ましい対応を知っていても、いざ発作に対応する場面になると実践できていない場合があることがわかる。

V. 結論

保育所、幼稚園に勤務する保育者を対象に、てんかんの子どもへの対応経験および対応についての認識について質問紙調査を行い、以下の結果が得られた。

- (1) てんかんの子どもを受け入れている場合には、保育時間中に発作が起こり、保育者が対応する機会が少なくない。
- (2) てんかんへの正しい対応を認識している者が多い。しかし、少数ではあるが対応を誤認している者がいた。
- (3) 発作時にとるべき対応を知ってはいても、実際に発作が起こった時に望ましい対応を行うことができている場合がある。

【文献】

- 片山美香(2010)保育士がもつ慢性疾患患児の保育への意識に関する研究, 保育学研究, 48(2), 145-156.
- 守口絵里・永井利三郎(2015)小児てんかんにおける学校と家族の連携状況に関する検討, てんかん研究, 33(1), 3-11.
- 杉浦信子・小貫悟・平野浩一・小沢浩(2012)小児てんかんに関する保護者、専門職、医学部学生の意識調査, 脳と発達, 44, 41-44.

Corresponding to Epilepsy in Childcare Scenes by Daycare Staff

Recently, increasing number of children with chronic condition are entering into daycare centers and kindergartens. In childcare scenes, correspondence to children with epilepsy is most likely to be in the hands of nursery teachers.

In order to clarify the daycare staff's experience dealing with children with epilepsy and their awareness how to correspond, we conducted a questionnaire survey subjecting daycare staff. They responded that 36% (47) have dealt with children with epilepsy and 76% of those (35) have the experience dealing with them in epileptic seizure. Based on this, it clarified that the chance of daycare staff dealing with children in epileptic seizure is not uncommon.

When we asked all the respondents how to correspond to children having a seizure, the most common response was "measure the duration of the seizure" (92%, 119), "call other nursery teachers" (90%, 116) and "contact the parents" (90%, 116), consecutively. When we compared the daycare staff that have dealt with children in epileptic seizure

know the optimal treatment and what they actually did, it clarified that they know the optimal treatment but they could not do it in reality.

If they accept children with epilepsy, there is a chance that they have a seizure during childcare and nursery teachers have to deal with it.

Even when they know what to do, there are cases where they cannot do what is optimal to do when children have a seizure.

Also, even though it is very few, some daycare staff misunderstand that putting a handkerchief or disposable chopsticks in their mouth is an optimal treatment.